

うたかた 泡沫の秋

岩橋邦枝

新潮社



うたかた
泡沫の秋

岩橋邦枝

新潮社



泡沫うたかたの秋あき

発行 一九九五年五月二五日

著者 岩橋邦枝いわはしくにえ

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

162 東京都新宿区矢来町七一

振替 〇〇一四〇一五―八〇八

電話 編集部 03(326)5411 読者係 03(326)5111

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 大日製本印刷株式会社

©Kunie Iwahashi 1995. Printed in Japan

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

うたかた
泡沫の秋

週末に帰宅して、日曜日の夜また都内のマンションへ戻る夫を、いつもどおり最寄りの私鉄駅まで車で送った。娘の恵子が運転して都内まで送り届ける役を受持っていた頃は、私も気が向くと老犬をつれて同乗し、夫の勤め先の近くに借りた部屋へ一家で移動してくつろいでから、深夜の高速道路を引返した。まだ彼が病後の定期検診を受けていた時期だった。

私の提案に、はじめは気乗りしなかった夫も、通勤に便利な場所に随時寝泊りできる一室を持つてみると体が楽になって喜んだ。だが最初のうちは週に一と晩かふた晩利用するだけで、相変わらず郊外から電車と地下鉄を乗り継いで出勤していた。せつかく別宅を用意したのに、と私は思い、夜中に酩酊して玄関のチャイムを鳴らす彼へ文句がましく言った。食事時にむし返し、夫の外泊を奨励するかのような言種を彼と娘に笑われていた。恵子が二度目の外国留学を決めて親元から離れ、家族の一員になりきっていたボチも今年の春先に老衰死して家の中が淋しくなるのと時を合わせたように、夫の帰宅は間遠になった。週末には帰ってくるが、それも他の予定でふさがれる日がふえて当てにならない。

都合よくいかないものだ、と私は苦笑しながら、といって夫婦同居の日常へ戻りたい欲求は乏しいまま留守居番めいた暮しが身についてきた。期限の迫った翻譯の仕事に追われているとき、彼が帰ってくると、迷惑する気持さえ湧く。彼のほうでも一人住まいの部屋の契約更新を、こちらの同意を見越した口ぶりで電話してきて決めた。家族で使うつもりで借りて、一年目を過ぎる頃まで私も娘も時どき利用したが、彼が独身者めいた住み心地に馴れるにつれ私のたち入る範囲は減った。入居して三年経つ間に、自宅の彼の書棚から抜いていく本や、宅配便で追加する日用品ばかりでなく私には目新しい調度も室内にふえて、ますます手狭になっている。

夫の体調と便宜に私がかい、頻繁に足を運んでいた頃使っていた電子レンジは、この夏三ヶ月ぶりで訪ねると、センサー付きの新型に買い替えてあった。出入りの電器屋から押しつけられた、と彼は言った。髪をたっぷりとったレースのカーテンや、実用本位の部屋にそぐわない花柄の大きなクッションも、出入りの誰かの押しつけなのね、と私は茶化した説明で自分を領かせ不審と不快を紛らせた。

そのつもりになれば、夫に説明を求めて問い詰める材料には事欠かないが、勘づかないふりをしてやりすごせばそれで済むことだ。じっさい、ぶじな暮しが保たれている。私は、些細な口論がこじれて彼と睨み合うとき、夫婦の押れあいをいっきに壊して今の生活にけりをつけたい衝動にかられる。目つきにそれが表れるのか、きまって彼のほうから下手に出てその場を有耶無耶におさめる。大病のあとで年齢のわりに老けた彼の顔にうく億劫げな苦笑や、よけいな煩わしさを

避けようとする口ぶりが、殆ど反射的に私を冷ます。彼の苦笑と口ぶりに呼応するものが、たしかに私の内にある。夫の身辺に、穿鑿心せんさくしんをしげきされる事柄がふえはじめてから、私はマンションの部屋の合鍵を持ち歩くのはやめて、彼から呼ばれたときだけ出向くことにしている。

駅前で、一泊旅行へ出るような鞆をぶら提げて降りた夫と、車窓ごしにかかる声を交わしてUターンした。人通りの多い日曜日の商店街を避けて迂回した先の、旧街道沿いの農家の軒先に、ドライブ客を当てこんでもぎたての多摩川梨や秋茄子を並べた台が、まだ仕舞いこまれずに裸電球の燈火をうけていた。今夜の夫は都内で寄り道すると言つて、早めに晩酌を切りあげた。車で片道十分足らずの駅へ向かう途中、腕時計を覗きながら

「もし八木沢から電話があつたら、少し遅れるとつたえておいて」

と呟いた。そして、私が「麻雀？」と聞くのへ、彼もおざなりに「いや」という返事で済ませた。八木沢は、夫が危篤から持直して放射線療法を受けていた長い入院中に数回見舞つてくれたが、それから何年も経つて夫の交友関係に疎そくなると時たま聞く噂も私の興味に触れてこなかった。

夫は半月ぶりに、金曜日の夜から自宅でゆっくりすごした。今さら気疲れするわけではないのだが、明りをつけっぱなしにした無人の家へ戻り玄関で男物のサンダルを隅に置き直して上りながら、泊り客を送り出して一と息つくときの心地をおぼえた。片付けないままになっている食卓のまわりに煙草の匂いが残っていた。私は、さきほど駅へ向かいながら遅刻をちよつと気にかけた

夫の隣りで、ふとあやしんだ。友達と約束があるならあると、なぜ早くはつきり言わなかったのか……わたしが当然のように夕捲えにかかったので、仕方なしに出かける時間を遅らせたのかしら。そんなふうに気をまわした。咄嗟に湧いたこだわりは、彼が出て行ったあとの食べ残しでどたついたテーブルを見てももう生じなかった。夫が傍に戻ってくると、つまらぬ勘繰りを向けていた頃へ何かの拍子に引戻されるらしい、やはり一緒に住まないままではいるほうが無難だ、と思った。

エプロンをつけて後片付けでうごきまわり、熱湯に通した布巾を一枚ずつきちんと四隅をひっぱって干し終ると、私は椅子に凭れてふだんの夕食後の居心地におさまった。一人分の紅茶を叮嚀に淹れながら、今週の子定をぼんやり考えた。

机に向かう日課の合間に、編集者との打合わせや友人と会う約束、週一回かようフィットネス・クラブ……目をつぶったままでも歩いて行ける廊下のように変りばえがしない。急な変更が生じるとしても大した違いはあるまい。夫が入院した日に、彼の末期癌の病状と迫った死期を医者から知らされ、いきなり足元をすくわれた体験は消える筈もないのに、いつのまにか私は平坦な日常をきめこんでカレンダーの二ヶ月先まで予定の書込みや丸じるしで汚している。

今週も、また和田貞代から呼出しがかかって半日つぶれるかもしれない。今では猫二匹の遊び場になっている和田氏の書斎で、編物の手を休めずにうごかしながらデスクの上の買物リストへ顎をしゃくってみせる老夫人を思い浮かべた。その茶色のしみの目立つ無表情な顔が、頭の隅に

押しこめてゐる男の明るいまなざしの笑顔を意識させた。私はかまわずに、今週出歩く用事に頭を向けておこうとした。

しかし、熱い紅茶にクッキーを添えて坐り直すと、抑えきれなくなつて麻井正行の顔を正面に招び寄せた。常日頃もつと後廻しにしてベッドの暗がりでくつろいでから、ぞんぶんに見入つて親しんでいる相手だった。案の定、日常の雑事にかかずらう時間の中で眺める彼は、現実の距たりに私にはつきり教えこむ鄭重な物腰とにこやかな表情を示すだけの紳士で、とりつきようがなかった。彼は、一週間前に私と顔を合わせたときの、秋らしい茶系統の色調でまとめた背広姿でひかえめな微笑を向けてきた。

先週の日曜日、私は新幹線で大阪へ行つた。その日の午後に麻井正行の講演があることを、大阪近郊に住んでいる母方の従姉から用事の電話のついでに教えられた。従姉は電話口で笑いなगर、「あんたの憧れの人」と言つた。そう冷やかされるような調子で、彼の噂を親類の者にまで聞かせていた頃の私はたわいのない感情を自分でもおもしろがつていた。

恵子が二度目の外国生活をはじめる前に、麻井正行の招待をうけ、お互いの娘と四人で食事した夜が彼との初対面だった。娘同士は留学先で友達になつてゐた。会食の席で、麻井の娘は留学中に高熱で寝込んだときもロックコンサートの帰り道で危ないめに遭いそうになつた夜も、恵子が助けてくれた、という私には初耳の話をして「わたしの恩人なの」と父親のほうへ大仰に瞳を張つてみせた。一重瞼の柔和な目元が親子よく似てゐた。私と娘の恵子は、科学者の彼の専門分

野には無縁だが、美術批評家でもある麻井正行の名前は以前から知っていた。彼が四十代の頃に上梓した西欧美術紀行を、私はたまたま当時読んで次の外国旅行の折に携え、手引きに役立てた。おかげで、彼と初対面の席で共通の話題が途切れなかった。麻井は、恵子がこんどのウィーン留学で絵画の修復技術を習得するというので興味を寄せ、心当たりの友人に紹介状を書く約束をした。そして私の翻譯業にも、関心ありげな問いを向ける礼儀を示した。会話の相手の目をおだやかに見守る態度は、隣りへ顔をかしげて自分の娘のお喋りを聞くとときも変りなかった。彼の身についた応待だとわかっていながら私は、向かいの席からまともに目を注がれるたびにそのまなざしが体内にしみ入って、涸^かれかけたものがほぐれていくのをおぼえた。ほぐれて潤った心地は、家に帰り着いたあとまで持続した。約束の紹介状は、それから数日おいて彼の娘を通して恵子に手渡された。彼は学会の用事で渡米していた。私の名で送った礼の品と手紙には、彼が帰国した筈の翌月を過ぎても何の返事もなかった。礼状に返信を書く人はいない、と私は苦笑して諦めた。会食した夜の別れ際の挨拶で、麻井はまたぜひ会いたいと言い、こちらの都合を訊ねた。そんな社交辞令を当てにしていた気持もやがて醒^さめた。

また会う機会を望むには遠過ぎる相手だったが、今年に入って、知人の文学賞受賞祝いの立食パーティで麻井のほうから私の姿を見かけて声をかけてきた。パーティ会場は混みあっていた。麻井の傍には入れ替わり立ち替わり人が寄ってきて、ただでさえざわついた場所で落着いたやりとりはできなかった。彼は、傍から離れようとしないうちに私を律儀にいちいち立話の相手に紹介した。

娘同士の関わりを抜きにした友人あつかいの紹介や、目の前の相手にひきあわせるはずみで私の服の背中へ手を置く仕草に、自分勝手な意味をつけて私はいつそう離れ難くなったが、彼の迷惑と場所柄を弁えなくてはならなかった。馴染みの編集者や同業の知合いと喋っている間に、彼を見失った。目で探しまわり、念のために会場の外の受付へ行つて訊ねると、麻井は十分ほど前に一人でひきあげていた。もう無駄にきまつているが、急いで一階まで降りてみた。まるでとり返しのかぬ失策をおかしたように顔面がひきつるのを自覚した。

私は、一階ロビーの奥の椅子に坐り、うろたえた行動に呆れて滑稽視できるようになるまで、俯いて呼吸を数えていた。その姿勢に照れる余裕が戻るとほっとした。活動範囲の広い麻井正行が、半年余り前に一度会ったきりの、それも娘を介した顔見知りにはすぎない五十女を憶えていて話しかけてくれた。それだけで上等じゃないの、追っかけるなんて年甲斐もない。そうあしらつて打切るには効きめのありそうな鏡の前に立つために、私は化粧室へ向かった。

鏡でたしかめる容姿は、肌の色をひき立てる照明の工夫にも助けられ、夜のパーティー向きの化粧と服装がつくり出す若さで私に気休めを与えた。その装いの奥に、衰えた肌や、毎月の女の生理の濁れた体が年齢をむき出しにしているとはいへ、麻井はそこまで関わってくる筈もない相手だ。社交的なみじかい会話が終った再会の場で、彼に残した外見の印象だけをかりながら、鏡のさしつけてくる姿に怯まずに済んだ。うぬぼれ鏡、と呟くふざけた気分にもなつて、私はついでにコンバクトを取り出し上氣している顔を直した。

麻井正行と再会した夜からさらに半年過ぎた。その間に私は二回、彼へ便りを書き送る口実にありついた。一回目は英米文学の研究者と共訳で出した短篇のアンソロジーに、ほんの数行の手紙を添えて送った。はじめは別便で手紙を出すつもりで書きかけ、一人よがりな恋文になるのをおそれて短冊型の一筆箋に、また彼と会う機会をねがっていると書くにとどめた。共訳の、しかも麻井が読みそうにない書物を送りつけた行為を悔やみはじめた矢先、彼からハガキの礼状が届いた。有難迷惑な献本に挨拶を返すとき誰でも用いるような字句が並んでいるだけだったが、私はたわいもなく元気づいた。青インクの線の太い、読みやすい字体で五行しるされたハガキを何べんも読み返し、ハガキの文面をそっくり頭に写し取った。

次に口実を見つけたのは、夏休みに入った恵子とアメリカ西海岸でおち合い、私は仕事の用を兼ねた小旅行、彼女は麻井の娘と一緒にすごした留学時代の友達や知人と再会する数日間を挟んで、のんきな二人旅が続けているときだった。恵子がかんどの留学先で、麻井の紹介状を役立てないまま彼にまだ何も報告していないと知らされ、娘の筆無精にかこつけて私から便りを出した。恵子も一筆書き添えた。献本のときと違って彼の返信を諦めてかかっているながら、そのとおりになるとかるい落胆が残った。私は、麻井に届く見込みのない思いを向け続けてきたこの半年間に、彼の書いたものを美術雑誌のバックナンバーも探し求めて溜めこんだ。麻井正行の著書についている略歴で、私よりも六歳年上と知って驚いた。容姿ばかりでなく、会って受ける印象は六十過ぎの男とは思われなかった。

私は書店で美術書の棚を物色しているとき、頭の中ではよそ見して、疾うの昔に断念した志望を振返ることがあった。私が教員生活をやめて北九州から上京するとき、母は「ポスターか挿絵か知らんが、賞一つとったぐらいで都会で食べていけるもんですか」ときめつけた。まだイラストレーターという名称は当時使われていなかった。仮りに母の予言がはずれ、私が美術の分野で成功していれば、麻井に近づく手だてを見つけることは易しいだろう……。

そんな子供じみた妄想が、聴衆の一人に加わろうとして大阪へ向かう列車の中でまたぶり返した。後ろの席で、囁れ声の女がつれを「おとうさん」と呼んで、昼食時を気にかけてたり網棚から何か下ろしたりしてうるさく世話をやいていた。週末の帰宅をとりやめた夫に礼を言いたい気持ちになった。ハンドバッグ一つを持って日帰り旅行に出る身軽さが、私を快活にしていた。

新大阪駅から、従姉に聞いておいた市内のビルへタクシーで直行した。講演会場は一階奥のホールだった。受付を設けたホール前のロビーには、予想外の行列ができていた。その大半は地味な服装の男たちで、場違いを承知の上で宇宙物理学の話を聴きに、というより演壇の人物を観るために来た私の料簡が浮薄に際立つようだった。人の隙間から受付を覗くと、横につないだ机に“会員”と“一般”の毛筆書きの紙が垂れ、それぞれ名簿が用意してあった。私は順番を待って、受付係の一人から、一般の聴講者はハガキの申込み順で、すでに定員を超えて締切ったという説明を聞き、すぐ人だかりの外へ出た。従姉は電話口で、希望者は誰でも入れると言って、地元の新聞に載った麻井正行の講演会の日時と場所を教えてくれた。冷やかしながら教えるにはそれで

十分だ、もし「行きます」と明言してみせても従姉が真に受けたとは思われない。私は、ホールの入口を斜^す向かいに見る壁際のソファのところへ行つて、坐りこんだ。受付で掛け合つてまで、入場したい熱は湧いてこなかった。むしろ気持はしりごみした。場違いな女が紛れこんでは彼に失礼じゃないか……。講演の内容から外れた関心に牽かされて出向いてきた私は、たしかに冷やかし半分の見物人と変りなかった。

どこかでお昼を食べて、久しぶりの大阪の街をぶらついてみよう。しかし、あと少し待つて講演がはじまつてから、と踏んぎりのつかない体をソファに置いているとき、麻井正行の姿が視野に入ってきた。世話役らしい男と一緒だった。麻井は、大型の茶封筒を脇に持ち、むぞうさに足を運んできた。しらが頭の恰幅^{かつぶく}のよい男と並ぶと、いっそう若若しく見えた。会場の入口のあたりにいた数人が、急ぎ足で行つて麻井を迎えた。その人たちと挨拶を交わしながら、彼がこちらの視線を感じたようにふと目を移し「おや」という表情で会釈した。

麻井は、つれだつて歩きだした一団から離れ、固くなって立っている私のほうへ近寄つてきた。面喰らつた笑みが瞳を明るくしていた。

「里見さん、どうしてここに……」

「お久しぶりです。ちょうどこちらに来るついでがありましたので、ご挨拶だけでもと思ひまして」

私の口はすらすらとうごいて、発声も尋常だった。私は、彼が笑顔を頷かせ恐縮するような挨拶で

応えてから、叮嚀に一礼して、傍で待っていた人たちにまた囲まれながらホールの正面口を通り過ぎた先のドアの奥に消えてしまふまで、貪るように見続けた。

街歩きをとりやめて、駅へまっすぐ引返した。外は曇天になっていた。待つ間もなく上りの新幹線が発車した。日曜日の午後のまだ早い時間のグリーン車はすいていて、麻井正行と間近に向き合った場所から運んできた心地を邪魔されずに済んだ。習慣になっている朝昼兼帯の食事を抜いたままだったが、空腹感には胸に持ち抱えているものにふさがれて消えていた。私は、膝にのせたハンドバッグの上で両手を揃え、行儀よく坐って、注がれてくる目を感じ続けた。明るい驚きを含んだ男の笑顔の後ろを、灰色の空の下景色が列車の速度にのって流れていった。目におさめたほんの数分間の彼の像が、繰返し歩み寄ってきて現実の距たりをだんだん縮めた。今夜にでも彼から、慌ただしい対面を補う電話がかかってきそうな、これを機に彼の関心へ入り込めそうな期待心がうごき出すにまかせ、私はとんぼ返りの半日をいっきよに満たしてくれた場面を見守っていた。

その夜、食事中に和田貞代から電話で、かよいの家政婦の引継ぎがまだ見つからずに困っていると訴えてきた。足腰の痛みで買物にも出られないという。老夫人の長話は、呼出音が鳴り出したとき閃くように接近して微笑んだ麻井正行から私をひき剥がした。食料品の買出しや、掃除や猫用トイレの手入れをまかされる女にふさわしい返答で先方を安心させ、受話器をおろした。甘い期待心は抑えるまでもなく萎えて、次の日から電話のベルに期待はずれを度重ねないで済んだ。

日曜日の大阪行きは、夢想をつなぐ材料を仕入れに出かけたようなものだった。

半月ぶりで帰宅した夫と雑談しながら、私は和田家の家政婦の代行を半日つとめたことも告げた。夫の母親が和田貞代と長年の友達で、私たち夫婦も若い頃にはよく訪ねていたが、やがて彼をはずした女だけのつきあいになり姑の死後はそれも途絶えた。おとし和田氏の訃報を新聞で見ても聞かない頃、私は貞代から電話で呼ばれた。独居の寡婦になった彼女にその後も午後のお茶に招かれて話の相手をつとめるうちに、だんだん手助けする用がふえた。週一回かよってくる家政婦が長続きしないせいでもある。

「まだ、人さまの世話になるほど老いぼれちゃいませぬがね。家政婦さんは、ぼっくり逝ったときの用心に来てもらっているのよ。わたしの亡骸よりも、猫たちが、早く見つけてもらわないと飢死にしますからね」

と、貞代の声色を真似して私は、相変らず口だけは達者な彼女のようすを夫に話した。

「あれでは家政婦も続かないわ。それでいて困ると、強気な口癖をきれいに忘れるんだからべりね」

「きみはよくつきあうよ。あの人の子供たちのほうが近くに住んでいるのに、どうしてそっちに頼まないの」

「さあ知らない。他人のほうが面倒がないからでしょう」

「人助けもいいが、きみはほかでもそんな役を、よく引受けているみたいだ。世話好きになった